幻術
奇術

〔古今和歌六帖山〕をの、え

をの、えはくちなばまたもすげかへんうき世の中にかへらずもがな

〔枕草子三〕けさう人にてきたるはいふべきにもあらず、たゞうちかたらひ、又さしもあらねど、をのづからきなどする人の、すのうちにてあまた人々ゐて物などいふに、いりてとみに歸りげもなきを、ともなるおのこ、わらはなど、をの、えもくちぬべきなめりと、むつかしければ、○下略

○

〔倭訓栞前編末二十九〕まぼろし。　幻をよめり、目亡の義也といへり、假そめに目に見るかとすれど、實はもと無物なれば、やがてきえうせぬるをいふ、夢幻のさまも、幻術のふりも、さか也、よて方士をさして、まぼろしといひしも侍るなり、

〔源氏物語一桐壺〕みやす所○桐壺更衣はかなきこゝちにわづらひて、○中略夜なかうちすぐるほどになん、たえはて給ぬる、○中略かのおくりもの御らんせさす、○桐壺帝なき人のすみかたづねいでたりけん、しるしのかんざしならましかばとおもほすもいとかひなし、

尋ね行まぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく

〔河海抄一桐壺〕方士楊貴妃○唐玄宗妃を尋て、金のかむざしのなかばをもちてきたりし事也、まぼろし、方士事なり、幻術士の名なり、玉のありかは魂在所なり、

〔源氏物語四十一幻〕神無月は、大かたもしぐれがちなる比、いとゞながめ給ひて、夕暮の空の氣色なども、えもいはぬこゝろぼそさに、ふりしかどゝひとりごちおはす、雲ゐをわたる雁のつばさも、うらやましくまもられ給ふ、

大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ玉○紫上の行衛たづねよ、なにごとにつけても、まぎれずのみ月日にそへておぼさる、